

大正八年故玉置琢水師に入門、後、谷暉水師の指導を受け昭和二十八年から四年間一水会城東支部長、一水会本部相談役に続き現一水会本部副会長で本能寺、敦盛、茨木などの曲を得意とし錦心流の発展に尽くした。総伝。謹んで哀悼の意を表します。

榎本芝水(弁之助)氏

老衰のため八月十九日逝去、享年八十五。明治四十二年故水田錦心師に師事して錦心流の奥儀を極め、教授所を開設して今日まで幾多優秀な子弟を育成して世に送り出し現琵琶界の第一人者として斯界に貢献された功績は極めて大きく惜しい人を亡くした。石童丸鉢の木、父・乃木將軍などの抒情曲を得意とし繊細且つ美声で一世を風靡した。謹んで哀悼の意を表します。

古谷寛水(義雄)氏

直腸がんのため一昨年開腹手術を受け爾来安静のところ病革たまり八月二十日逝去、享年八十三。大正中期吉田豊水師、秋本碧水師に師事、劇的内容の琵琶歌詞を好み錦心流一水会総伝で豪壮な演奏振りには定評があった。また史実に詳しく「京絃」や「錦心」紙に毎号蘆薈を傾け琵琶関係の多彩な記事を寄稿して同志を啓蒙し大きな功績を残された。なお書道は故山本寛山師の直門で出藍の誉れ高く多くの門弟を育くみ一方の雄として斯道に君臨した。毎月発行の「京絃」題字や昭和三十六年京絃社発行「現代琵琶人大鑑」の背文字は同氏の染筆になるものである。二十二日送葬。謹んで御冥福を祈ります。

予告

- 錦心流琵琶秋季演奏大会 十月一日(日)正午大阪西区民センターホール(西区北堀江御池通五ノ一)、主催一水会大阪支部(支部長小川吟水氏)。ゲスト京神支部員の外中谷襄水、伊勢谷安江諸氏。
○ 参遠琵琶研究会 十月一日(日)朝十時豊橋市旭公民館。ゲスト名古屋水谷浩水、奥村慧水、静岡岡尾鶴城の三氏。
○ 第四十八回旭会全国大会 十月六日(日)八幡市市民小劇場(司会横濱旭会)。七、八両日演奏会(九十余曲)、九日総会。
○ 橋会全国大会 十月七日(日)東京渋谷東邦生命ホール。
○ 新潟、山形、秋田観音演奏大会 十月八日(日)正午秋田協働社大町ビルホール四階、秋田琵琶連盟。一水会秋田支部共催(幹事長星野雄水氏)。熱海梧水、渡辺頑水両故人の追悼を兼ねた催しで東京一水会長鈴木六水、同顧問宮原琢水両氏ゲスト出演。
○ 京都琵琶協会十月例会 十月十五日(日)一、二時本部平井春嶺会長宅。(月末開催大会の準備会兼)。全員繰合せ出席のこと。
○ 阿部秋子琵琶の花道特別公演 十月二十二日(日)正午名古屋中小企業福祉会館、主催名古屋秋声会。(詳細別項参照)。
○ 光栄会琵琶吟、詩吟詩舞大会 十月二十二日(日)正午高槻市民会館、主催山崎光栄会。
○ 三十周年各派合同演奏大会 十月二十九日(日)正午京都商工会議所ホール、主催京都琵琶協会(会長平井春嶺氏)(別項参照)。
○ 第十七回琵琶と詩吟詩舞会 十月二十九日(日)正午西宮市夙川公民館松下ホール、主催三浦蓮水会。蓮水会員と一水会神戸支部員総出演、ゲスト一水会本部会長鈴木六

水氏並に内田欽水、小川吟水、木庭旭山各氏、協賛青柳芳枝とその一門。

とがき 今年七月はじめから約二ヶ月間に亘り雨のない記録的な猛暑の苦しい夏が続いて、九月に入ると途端朝夕の涼風に恵まれてホッとしたり。十月は昔の月、琵琶の月、演奏会など各地からの嬉しい便りに接すると今更ながら自分も琵琶をやっている良かったとつくづく思う。閑話休題、九月の本欄で尺八が塩ビパイプで出来ているのと同じ邦楽の琵琶楽器も何とかならぬものだろうかと思いた。ところが折返し浜松の柿沢篤峰さんから同門の八十三才に於ける先輩が厚手のベニヤ板で簡単に薩摩琵琶器を製作され案外良い音が出るとのお手紙を頂いた。一見琵琶に似ているが値段も安く重量も軽く持ち歩きに便利、しかも現物を見ずに聞いて居れば従来のものと大差ない音色が出て、これが高価な素材などを使わずに出来たものかという感を受ける。科学技術がこれだけ進歩発達しては、琵琶楽器も既製品ばかりに頼らずに自己のため、世のため、人のため、これ一つ智慧を絞られては如何か? 少くともこれからは琵琶を始めようとする新人たちはきつと喜ぶにちがいない。

昭和五十三年十月一日発行(非売品) 編集者 植村 稟 水 行所 高槻市津之江北町一ノ二 電話 〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二九二号 京絃社

戦国時代の女性

(七)



清盛の妻、時子と 頼朝の妻、政子 (2)

清盛は美しい女には忍び心が傾いていった。勿論当時は一夫多妻、その上に子供は非常に死亡率が高くて、それゆえに沢山の子供を持つことは、殊に平氏のような武士の家では、一族郎党の強大さにもつながる重要な基盤であった。だからこそ時子も夫の子供を次ぎ次ぎと引きとって養育したのである。

しかし、平治の乱のあと、敵の大將源義朝の愛妾常盤が三人の男の子の命乞いをしたのを許し、しかもそのあとで常盤が夫の愛妾として囲われ、一人の娘さえ生んでいるのを知ったときは、時子も心平らかでなかつたにちがいない。

義朝の長子頼朝は、十三才でこのとき控えられ、首を刎ねらるべきところを、清盛の継母、池の禪尼の命乞いによって救われ、伊豆に流された。常盤の子供たちを救けたことは、夫の心の寛大さ、思いやりの深さとして十分

理解できたが、常盤のことは又別で、時子は弟の時忠と相談して常盤の娘を里子に出し、常盤を藤原長成の後妻とさせて事を落着させている。鮮やかな手際で、清盛も如何とも出来なかつた。

清盛は、一方ではまた平家一門の守護神として終生信仰が篤かつた。安芸の巖島神社の巫子との間にも一女をもうけている。子供を産まなかつた愛人に至っては、数知れずあつたであろう。 そのような女たちのなかで、哀れ深いロマンスとして、祇王祇女の姉妹の白拍子と、仏御前の物語がある。洛西嵯峨野の「祇王寺」は、いままそのロマンスの哀れをとどめている。

時子は夫の美女漁りを一方におきながらも、平家の棟梁の妻として夫と共に子女の嫁組みに情熱を注いでいる。保元の乱のあと、政界の実力者となつている藤原信西の三男成範を長女の婿にした。桜町中納言と称した風流入

の成範に配した清盛の娘もまた絵の妙手で、彼女が紫宸殿の障子に描いた「伊勢物語」の絵の鳳凰は暗いと伝えられた。 自分の腹の娘ではなかつたが、時子はこの娘の芸術を愛し、やさしい心づかいを自分にも見せてくれるのを歓迎した。更に平家にとつて決定的といつてよい姻戚による幸運が続いた。時子の妹の滋子が後白河上皇の寵を得て、憲仁親王(後の高倉天皇)を生んだのである。

滋子は局(つぼね)から女御にすすみ、二条天皇が二才の皇子(後六条天皇)に位を譲られると、滋子の生んだ憲仁親王が東宮に立つ。そして清盛は位入臣を極める太政大臣になつたのであつた。時子の幸福は今海のように広大なものであつた。更に自分の腹ではない娘であるが、盛子を関白忠通の嫡子基実に嫁がせ、別の一人の娘は藤原基通に嫁がせて、撰閣家として結びついた。勿論重盛はじめ彼女の妻子宗盛、知盛、重衡たち男子はそれぞれ昇進して、重盛は正二位内大臣近衛大将、宗盛は従一位内大臣、知盛は従二位権中納言、重衡は正三位近衛中将と、きら星のように一族あいついで頭官を専占し、遂には廟堂の大半を一族一門で占めることになり、更に妹滋子の生んだ憲仁親王が即位して高倉天皇となると、兄の時忠は外戚として権勢を振るい、「平家にあらざれば人にあらず」とまで云い放つようになる。 清盛が、時子の生んだ娘徳子を高倉天皇の後宮に入れて、外戚として権威を得る野心を

抱くのは自然な成り行きである。時子は、それが我が子、平家一門の幸福を永続させる決定的な手段と信じ、夫に協力して行く。夫の男性としての魅力、明るく寛やかで果敢、情熱家で美しいものを無上にあし、豪華を好み、そのような生活をつくり出し、維持してゆく才腕技量を持つ夫を彼女はいつも信じ、影の協力者としての自分を幸福に思う。

後白河法皇の養女という名目で、十五才の徳子は十一才の高倉天皇に内した。五年経って皇子を産み皇太子に立つ。満二才で即位させ安徳天皇となった。

反平家の空気がようやく公卿の間に起ってきた。後白河法皇の反平家の感情は事毎に露骨となる。すでに先年鹿ヶ谷の陰謀と呼ばれる事件が起っている。清盛はクーデターを敢行し、法皇を幽閉した。しかし法皇は諸国の源氏に「平氏追討」の意志を示し、以仁王の令旨として秘かに伊豆の源頼朝、木曾の源義仲に伝えられた。

やがて木曾勢の入洛、富士川の敗戦という悲報のさ中に、清盛は六十四才で急逝した。人も羨む幸福な運勢にいた時子は一転して二位の尼となった。

西海に敗走し、壇の浦で一族滅亡の日を迎え、時子は安徳幼帝を抱いて海に沈んだ。中宮徳子も入水したが源氏の手で救われる。生ける屍のような建礼門院徳子の寂光院での念仏三昧の生活を、時子は知らずに死んだ。

琵琶



忘れられんとする音の世界

村山道宣

琵琶という楽器を知らない人が、私達の周りにいるだろうか。実際に楽器を見たり、触ったりしたことのない人は多いかも知れないが、恐らく私達の多くが、琵琶ないし琵琶楽について何らかの知識を持ち、漫然としたイメージを懐いていることであろう。

現在、琵琶という言葉から多くの人が連想するのは「祇園精舎」「那須与市」「横笛」などで知られる「平家物語」を哀しく、艶やかに語る琵琶法師の寂しげな姿であろう。

中では、ラフカディオ・ハーンによって英訳もされた、あの「耳なし芳一」の物語を、夢中で読んだ記憶を持つ人もいるかも知れぬ。また、その大いに流行した時代を知る人も現在では少なくなってしまったが、一昔前、薩摩琵琶や筑前琵琶に慣れ親しんだことのある老人達は、和服に身を包み、端座し、含みのある独特な声と勇壮な振さばきで「城山」、「広瀬中佐」、「壇の浦」などの曲を弾唱する琵琶弾奏家の姿を、懐しく想い浮かべることであろう。

琵琶楽の裾野

しかし、このような巷間の琵琶に対する一般的なイメージは、必ずしも正確に我國の琵琶全体を見渡し、理解したものと云い難い。我國に於ける琵琶楽の裾野は驚くほど広く、また深いのである。私は未だ、余り世人に知られていない、この琵琶楽の「裾野の広がり」についてこれから述べてみたいと思う。

一枚のレコード——北田明澄

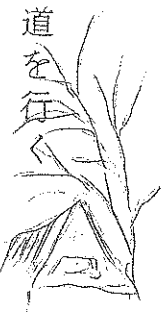
私と琵琶とのそもその出会いは、全く偶然の出来事であった。それは、たまたま一枚のレコードを聴いたことに始まる。

ポリドールから昭和三十八年の秋、発売された琵琶楽大系に収録されている故・北田明重氏の奏唱する地神経、観音経、盤若心経を私は偶然、耳にしたのである。その時、私は耳新らしい、その特異な音の世界に驚き、体中が湧き立つ様な感動を覚えた。寂びの効いた長年の壇家廻りで鍛え抜かれた、腰の坐った音声が、淡々と荒神の由来を説いていく。何とはなしに懐しく「有難さ」や「安らぎ」を感じさせるその不思議な声音とリズムは、

西郷 天 風

我が道を行

六十五年(六二)



（註）本稿は押田旭翁女師の好意により、村山先生が執筆されるもので、我國に於ける琵琶の起源から現在の薩摩系琵琶、筑前系琵琶の詳細に言及し、今後十数回に分けて毎号連載します。御期待下さい。

やがて甲高い艶やかな、聞いていると自然と踊り出したくなるような、陽気な琵琶の調べを引き出して来る。声の巧みな抑揚と、経声のリズム感を、次第に増幅させていく琵琶の挽音、これらの紡ぎ出す妖艶な音の世界は、聞く者の想いを遙か十萬億の仏土を隔てた西方浄土へと飛翔させ、あたかも一時の極楽世界を垣間見せてくれるかの様であった。その時にとつともない感動が、私を「盲僧琵琶狂」にしてみましたのである。以来、私はテープ・レコーダーを背負い、地神盲僧が現在も活動している人と人づてに聞く、九州・中国地方を彷徨い歩くようになった。

（註）本稿は押田旭翁女師の好意により、村山先生が執筆されるもので、我國に於ける琵琶の起源から現在の薩摩系琵琶、筑前系琵琶の詳細に言及し、今後十数回に分けて毎号連載します。御期待下さい。

渡台第一の目的である琵琶演奏は、新竹州知事の招待に依る「台湾人」と「薄陽江」の二曲だったが、その一ヶ月ばかり前の或る日、

基隆（キールン）港に近い日本国営の金山（金瓜石鉱山）を参観、いや、視察かたがた琵琶演奏の交渉に出かけた日の事。

この話は大歓迎の下に即座にまとも取りも軽く帰って見れば、日の丸旅館には未知の客が待っていた。

新竹州知事の秘書で、近日州庁制定か何かの記念祭にあたり、園遊会場の仮舞台に出演の方の要請であった。曲目は是非共「台湾人」のほか一曲をとの希望だったが、茲に特筆すべきは「台湾人」の歌詞について、一部改訂の要望であった。つまり、その日の参会者には有名人士多数が見えるため、我々斯道にたづさわる者の一応考慮せざるを得ぬ重要さを感じた。「台湾人」最初の大干、台湾島の土賊ども」の件りで、私はこの時以来、賊徒ども」と改め語りことにした。

当時台湾には、公学校と称する台湾人の子女のみを收容して、日本人と同様の権利義務を有つ国民、即ち「日本人育成」を目的とする学校があり、島民はほとんど此の学校を出て日本人になりきっている。

従って、北白川宮殿下を開国の神とあがめ、如何なる場合でも宮殿下の御名を耳にせんか、即座に威儀を正し謹慎の意を表す。その有様を見て、僅か半世期の育成が、よくも徹底したものと感じ入った次第だった。

勿論「台湾人」の曲は学校などの場合、必ず最初に演奏するのが例で、いよいよ「近衛兵の精鋭を、率いて御渡海召されしは、陸軍

錦心流琵琶・阿部勝水改め

阿部秋子琵琶の花道 特別公演

日時 昭和五十二年十月二十一日(日)

正午開場

会場 名古屋中小企業福祉会館六階ホール

- 主催 名古屋秋声会
- 後援 琵琶芸術同好会 中部琵琶連盟
- 特別応援
 - 東京 前田秋声 伊東 入谷錦鳳
 - 神戸 柴田旭堂 大阪 中山鳳水
 - 東京 谷 暉水 東京 桑名洲聖

中将大勲位、北白川の宮……と御名を耳にするや、忽然数百人、否、千を越す講堂内の生徒が一斉に姿勢を正す。その時の足摺りの音は物凄く騒音と化して、無我の境地にある弾奏者を驚かすこと再三に止まらなかつた。

かくて、五月末の新竹州庁附近の園遊会に於ける演奏を初めとして、金瓜石鉱山や公学校、小学校等々、既に「台湾人」を歌う事数回に及んだ七月のはじめ、何となく巷の様子に異状を感じた途端、日支事変が発表された。しかも、渡台最大の目的たる製糖王国訪問の準備が整った矢先である。さすが平素呑気癖せの私も一時台湾引上げを考えたが、取りあえず高尾市に従弟の伊藤猛三郎を訪ね、私の認識不足を知るや、当分二人の甥をつれて高

尾港の海水浴で数日の休養をとることにした。垂熱帯の地台湾、それはたしかに暑い。しかし東京や京大阪などの夏に比して、遙かに涼しい。それは四方の海が近いためか、午後必ず来るスコールのせい。日中曇る表面はほかほかとぼぼぼといるが少しも気にならず、日影の涼風は春、夏、秋の三季節に分けた毎日を楽しませて呉れる。

即ち、朝は花咲き鳥鳴り春の麗かさ。昼は必ず来るスコールの跡に涼風が、地面の熱気を吹きぬぐって身心ともに爽快の喜びを。夕やみせまる頃ともなれば、此処彼処にすだく秋虫の音に、人の世の哀歎を誘う風情など、さなきだに感傷的になり勝ちのところへ、日支事変勃発の騒ぎとなったそれが、昭和十二年七月七日だったのである。

そこで、二個聯隊の常備軍を擁する台湾では、早くも赤紙が日本人、台湾人の区別なく島内各所に飛び、出征兵士を送る人波が道路の両側に立ち並び、小学校や公学校の生徒達も仲良く日の丸の小旗を振りつつ、天に代りて不義を討つ、忠勇無双の我が兵は、敬呼の声に送られて、今ぞ出て立つ父母の国。と、声をからして歌うその有様に、何やら云い知れぬ感情を抱きながら日の丸旗に帰る。暫くは邦人たちの集りに琵琶を抱いて飛び廻る、至って呑気な日が続いたのは、一般世人の日支事変観が単なる一時的衝突であり、第一次上海事変と同様、三ヶ月ぐらいで終るものと見ていたからであった。

ところで、台湾の製糖業は、毎年九月から始まり、翌年五月までの九ヶ月が目廻るほど多忙な期間で、あとの三ヶ月は、遠く都会を隔てた糖キビ畑の真只中で、無聊に苦しむ閑散の毎日が続く。その間こそ我々芸能家を必要とする、従業員家族たちの大切な享楽期間なのである。

私はその時期をねらって、はるばる台湾行となった訳だが、折悪くこの事変騒ぎで行き詰ったものの、折角渡台をすすめて呉れた生産党の人たちの思惑もあり、しばらく成り行きに任せる事となり、八月末宿を高雄市に移せば、生産党支局長・長迫氏の肝煎りで附近の山奥に一泊、野猪狩りの歓迎を受けた。台湾人の案内者らを加えて一行二十名が五、六挺の銃を持ち、一台のトラックで一泊二日の山狩りは洵に面白い催しではあったが、結局三頭の野猪を追い出したに止まり、一頭も持ち帰れず一人の案内者は右腕に深創を受け、その猟犬は瀕死の重傷を負ったその状況は、今日なお眼底に見ることが出来る。



風林火山の旗のもと、戦国に渦巻いた

壮烈「風林火山」 辻 旭 城

武田信玄は、甲州の人たちの心には今も英雄として生きています。東海道本線富士駅から中央線甲府駅へ結ばれる身延線は、去る五月に全通五十周年を迎えた。

筆者は、身延線という名の示す通り、日蓮上人を祭る日蓮宗本山身延山久遠寺に参詣するつもりであったが、身延詣りは急いで詣っても一日はかかるので、残念ながら次ぎの機会に譲って先きを急ぐ。

車窓から眺める富士川沿いの谷間を走る身延線は、市川大門を過ぎるあたりから視界が広やかになって来た。富士川の源流釜無川と、笛吹川の流域にひらけた甲府盆地に差しかけたのである。列車はこの盆地の中をひた走り、やがて終着駅の甲府に着く。

甲府は山梨県庁の所在地で人口約十八万九千。富士駅からは身延線、東京新宿からは中央線、また富士五湖方面とは、御坂峠を越えてバスで結ばれている。

武田信玄と上杉謙信、両雄は幾度か大小の火花を散らせたが、その中でも川中島の合戦は余りにも有名である。甲府の街に足を踏み入れて、まづ目につくのが駅前堂々たる姿の信玄公の像である。そもそも甲斐の国は、戦国時代に武田三代によってその基盤が固められた。中でも勇名を天下にとどろかせたのが信玄公で、今でも甲州の人たちは甲斐の英雄、歴史のシンボルと云っている。その武田家の本拠地が甲府だ。

駅の背後二キロほどのところに武田神社があるが、ここが武田館跡。同族を押さえて武田宗家となった信玄の父信虎は、永正十六年(一五一九)石和の旧館からこの地に移り、以後武田三代の本拠地となった。更に二キロほど山手に入った要害城跡に、筆者は特別の魅力を感じた。新館とともに構えた城郭だが、ここも何の遺構も残っていない。しかしその方が却って昔のままのように思われる。

甲府駅から積翠寺行きのバスで二十五分、降りて十分許り歩くと、前方に腕を伏せたような山が目に入る。要害跡「丸山」だ。遠くからは穏やかな小山のようにしか見えないうが、近づくと仲々の峻険で、ここに信玄は産声をあげた。大永元年(一五二二)十一月三日のことである。信玄は滅多に泣かぬ子だったが、ひとたび泣き出すとその声はあたりをつんざくほどであったという。母は信虎に降つた旧敵の娘、それゆえ信玄の誕生は温かい祝福に包まれたものではなかったとも云われる。

信玄も長じて又そうした轍を踏んでいった。因果応報とでも云おうか、父を追放し、我が子を死に追いやり、そして自分の出世と同じく、旧敵の娘に子を生ませた。その子が悲運の武将武田勝頼である。

こうした道徳的な善悪から、信玄はしばしば悪人にもされたようである。しかし、そうした業(ごう)のようなものが、戦国に生きる疾風の武将には却って生々しい魅力になったのではあるまいか。

創立三十周年記念

時	十月二十九日(日)正午開演
所	京都商工会議所ホール (烏丸通り御池上ル)
主催	京都琵琶協会
各流派琵琶合同演奏大会	
会員十数名の外、静岡赤心流鶴翁、広島板谷旭邑、名古屋阿部秋子、大津伊藤旭暢の四名ゲスト出演。	



大阪夏の陣(一三)

山 川 流 水

「日本戦史・大阪役」によれば、西軍の毛利勝永が藤井寺に着いてみると、後藤又兵衛や薄田隼人の隊の敗残兵がドンドン引きあげて来る。だが真田幸村と合流するといふ約束を守って進まない。昼前住吉街道を羽曳野方面からようやく幸村の本隊がやって来た。これにて両部隊は並んで進撃する。

関東方伊達政宗部隊の片倉十郎が、家中の二男、三男から抜擢し、馬どころ奥羽の馬を訓練して編成した騎馬鉄砲隊八百を指揮して、真田幸村の赤装束隊に攻撃して来た。これを見た幸村は部下を伏せさせ「一歩も退くな」と号令する。伊達の鉄砲隊が銃撃しながら近づいてくると、これを幸村は充分近づけておいて、槍先を揃えて突撃を命令した。混戦乱戦の内に幸村部隊の大勝利となり、大阪方は菅田の西から藤井寺の線に布陣し、東軍は道明寺から菅田にかけて陣のちかちかとなった。

東西小ぜり合いを続けるうち、西軍が動揺しているとみて、攻撃のチャンスと判断する東軍の部将が、伊達政宗の大部隊の出撃を要請するが、政宗は動こうとしない。「わが部隊の先陣は朝からの激戦で将兵は疲労して、もう戦闘力がない」という程の戦いだつた。

午後二時半頃大阪城からの伝令が幸村のもとへ来た。この日、大阪城東方の八尾若江方面に出撃した木村重成、長曾我部盛親らの敗報を伝え、城内へ退却せよというので、夕四時ごろから退却を開始したが、東方の追撃は全く無しという堂々たる退却ぶりであった。

小松山、道明寺の戦いで東軍の戦死百八十、負傷二百三十余、西軍は戦死二百十余、捕虜にされたもの五と伝えられる。この夜、東軍は藤井寺、菅田、道明寺、古市で宿営、西軍は平野から天王寺、茶臼山に退く。

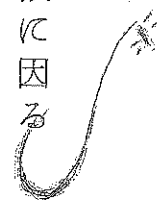
幸村は毛利勝永の陣を訪ね、勝永の手を握って嘆いた。「けさは夜明け前に先発の後藤又兵衛たちと道明寺で合流し、国分に進撃する約束をしていたのに、濃霧のため約束に遅れてしまふ。又兵衛や薄田隼人の苦戦を救援出来なかつた。豊臣家の運命もこれまでか」。勝永は「明日こそ雌雄を決しよう」と誓う。濃霧にからまる幸村の、こんな話がある。

平野区長吉原二丁目志紀長吉神社の社室の一つに、真田幸村奉納の六文銭の旗がある。長さ二米、巾四センチの麻地で、上に黒線二本、横二段に一文銭六枚が並び、すそは焦げているが真田の旗である。「中河内郡史」によると「大阪の役に真田幸村、戦勝を日蔭明神(志紀長吉神社)に祈願せし時神社の馬場にて休息し、麻地六文銭紋章の旗と刀剣を神社に寄進せり」とある。

糸捲磨滅に因る 空転の防止法

鈴木流泉

楽器も、年代を経ると「糸捲」が磨滅して大なり小なり「空転」するようになります。右に対して、私は、左記の如く処理をして居ります。



濃度の強い塩水(盃一パイの塩に、水を二杯)を作り、之に「糸捲」の瘦せた部分を漬けて、一と晩(概略)放置し、取り出した後二、三時間、乾燥させる。

合せる穴の方も、同じ塩水を、布、または綿などに透過させて、之を充填し、一と晩経ったら取り除いて、軸の方と同様に乾燥させる。一以上で「空転」は止まります。

まことに簡単な処置ですから、弛み始めたら、お試し下さい。

松脂を使用する人も居りますが、それは、回転が鈍くなり過ぎて、転調がスムーズにいかなくなりませう。

鉛筆を削るように、太い部分を削って之に合せ、軸を短かくしてしまつた人が居りましたが、形態を保つ上に於ては、勿論、感心できません。

楽器は、鳴りさえすれば「すがた」などは「どうでもいい」と云う考へ方には賛成致しかねますが、いかなるものでしょうか……。

(日本琵琶振興会会長)

琵琶歌詞の中抜き演奏

東京山口 豈水

「京絃」七、八月号の「あとがき」に出ま



した演奏会での歌詞の中抜きのことは極めて大事なことだ。琵琶人はこれを一考どころか二考も三考もする必要があると思ひます。

自宅で稽古の場合や、仲間が集つての茶話会式の場所ならばよいでしょうが、公開演奏会でのような中抜き演奏ばかりやっていると、世間一般の人の琵琶はなれた益々拍車がかかることになると思ひます。

此のような意見の投書などありましたら、なるべく取り上げ大書して下さるよう御願いたします。

今は日清・日露の戦争ものはあまり演奏されませんが、忠君愛国を筋としたもの、国内戦国武将の武勇伝もの等が大変多い。これらも現代人に愛されぬ要因であると思ひます。

古い昔の出来事や、学校の教科書に出ていない歴史上の人物の話などは、今の三十才ぐらい以下の若い人には全く興味がない。この事を知つてか知らずか、いつも古い歌ばかり演奏されている。新しい時代の歌、殊に戦後に於ける出来事の歌詞は殆んどない。

これが若い人の琵琶放れの大きな要素の一つであることを年配の琵琶人諸氏は御存知であるか。つまり今の琵琶歌の内容に問題が多く存在することを私は指摘して御参考にしたいと思います。

竹下翠風女史の短歌レコード
「万葉某女流名作集」短歌朗誦九首吹込みレコードが七月下旬短歌新聞社から発売された。希望者は同社または東京都杉並区下高井戸五二二一二の竹下女史へ申し込まれるとよ。

蓮水会。一水会神戸支部共催ゆかた会
七月二十三日(日)屋一時西宮市夙川公民館和室。菅公▽高原柳水▽大和徳古▽田中珠水、木宮梅水▽小楠公の母▽吉田秋水▽井伊大老▽大阪増田意南▽屋島徳古▽滝沢花水▽菊水の旗▽吉山瞳水▽西郷隆盛▽大阪杭泉詠水▽薄陽江▽同小西雨水▽唐人お吉▽神戸宮極旭桂▽小栗栖▽同田中款水▽楊貴妃▽川上琵琶三浦蓮水▽須磨の教盛▽楊貴妃▽琵琶塚▽大阪木庭旭山▽舟弁慶▽同小川吟水。

なほ三浦女史の長男朝光氏夫妻が西徒乙へ交響楽団員(ホルン奏者)から帰国来聴、全員拍手でこれを迎え一同楽しい夕食を共にして余技百出、八時を過ぎて解散した。

上野老人ホームに琵琶慰問
八月六日(日)屋三重県上野市の同ホームに於て大阪琵琶同好会が慰問演奏を行い八十人の老人を楽ませ、帰途伊賀忍辱者屋敷、芭蕉記念館を見学した。扇の的▽島津▽赤垣源蔵▽米原▽花の白虎隊▽馬野超子▽木村重成▽中川▽岸壁の母▽西村旭女▽常陸丸▽作花旭友▽本能寺▽辻旭城▽平和の鐘▽林田旭星▽乃木將軍鹿島詣▽石橋旭嶺▽関ヶ原▽中山鳳水▽堅田落▽天津八千代。外に詩吟五題。

京都琵琶協会の月例会
八月十三日(日)屋一時本部平井春嶺氏宅。薄陽江前▽平井春嶺▽部野▽楊嶽水▽禪師と

政宗▽桜井旭富▽五条橋▽山岡旭清▽川中島▽牧南水▽木村重成▽木下皇水▽石童丸▽馬場鴨水。外に伊吹正陽、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、荒木旭媛の諸氏出席。十月二十九日京都商工会議所にて開催の演奏会出席者、ゲスト、曲目等について協議のあと近くの料亭錦鶴にて伊吹、平井両夫人も交えて懇親会を開催、七時半散会した。

九月三日(日)屋二時同所にて開催。平井水内、木下、牧、安住、山岡、矢吹、楊、戸田、馬場、伊吹、植村各氏が出席して教氏演奏、芸談雑談のあと附近の料亭で食事と共にして散会した。尚当日例会に先立ち正午から役員会を開いて十月末開催の三十周年大会の具体的協議をなしその決定事項を報告して出演順の抽籤を行った。

嵯峨大覚寺諸芸奉納会

八月二十日(日)夕中島旭徳会の琵琶奉納。大覚寺の白堀沿いに老松の緑を縫うほほづき提灯は本堂を経て広沢の池畔を揺られ揺られて宝塔前の広場に宵弘法万灯会の花が開く。演奏会の大舞台が設けられ灯ともる頃には善男善女の約五百人が集まり満員の盛況で、筑前琵琶を始め各種芸能の熱演が相次ぎ夏の一夜は十三号台風影響の涼風の中に葦雲の間から真如の月が山の端から昇る風情はさながらみ仏の慈悲の光を仰ぎ見るように、演じる者も聴く者も今宵一刻を極楽浄土に遊ぶ思ひであった。(旭徳会員福西旭紅記)。安宅の関▽旭紅▽坂崎出羽守▽榊田旭波▽伽羅の兜▽中島旭徳▽新曲小督▽吉田旭正。外に琴合奏二、尺八合奏一、琴尺八合奏一、舞踊一、民謡五。

ラヂオ琵琶放送

八月二十三日(日)午後三時十分NHK、FM。筑前四絃「義士討入」五絃須須与市」中村旭園女史。

九月十四日(日)同右。「曲垣平九郎」木原綾子、「扇の的」平山万佐子両女史。

鈴木琢水(竹松)氏
心臓病のため八月五日逝去、享年七十三。

第二〇三回晴風会菊月例会

九月十九日(火)夕五時半東京中野区北部公会堂(五百円)。紅葉狩▽諸遊清風▽城山▽竹内薫峰▽旅▽大田尾松風▽雪晴れ▽中山礼風▽白虎隊▽本橋錦彌▽弁内侍▽岩崎竜風▽彰義隊▽野口隼水▽夢▽福島脹水▽湖水乗切▽大関英子▽隆盛▽望月啞江▽静▽緒方晴舟▽千曲川▽杉山雅俊▽設楽ヶ原▽山下晴楓▽乃木夫妻殉死▽會長浅野晴風。

八月二十七日、八日伊香保温泉ホテル白雲閣主催日本流吉井支部、協賛同総本部(宗家針谷錦古氏)。上記一泊会は錦古流三十三支部合同の集会で出席者二百四十四名の会員が朝十時半から夕五時半まで熱演を繰返し夜は吉井支部三十余名の上州名物八木節踊りや藤城会員五十名の人生大唱歌い合せ舞踊を始め隠し芸などが九時過ぎまで続き誠に楽しい大会であった。琵琶八甲田山▽井田錦城▽湖水乗切▽四方田錦隆▽夜討曾我▽針谷錦古の三曲の外詩吟独吟、合吟、剣舞など七十四題。